＜前回：「文化の宗教」の構想＞

（１）ティリッヒと文化の神学

１．西欧近代とキリスト教、関係の二重性。

・西欧近代の国民文学は、キリスト教との密接な関わりにおいて論じ得る。宗教は文化の母体である。

・近代の基本原理としての自律性・自由。

近代文化（特に、啓蒙主義的近代）は宗教的基盤からの解放を目指した。西欧近代の国民文学は、宗教的基盤からの分離において、それ自体として論じ得る。

２．文化の宗教からの分離あるいは宗教への批判（自律）。

↓

宗教から文化への反動（他律）

３．ティリッヒの「文化の神学」の構想

20 世紀の基調とも言える、文化と宗教との分離・対立を克服し、新しい関係性を構築する（神律）。

近代文化（啓蒙主義を基盤とした）とキリスト教、国家と教会、科学と宗教・・・。

４．Über die Idee einer Theologie der Kultur (1919), Kirche und Kultur (1924)

Paul Tillich. MainWorks. Volume 2, de Gruyter, 1990.

『ティリッヒ著作集　第七巻』（白水社、1978年）

「文化を支える内実は宗教であり、宗教の必然的な形態は文化である。」

５．意味論・意味の形而上学による理論形成。

・意味＝意味形式＝意味世界

意味は当該の諸項（記号）の値（諸項間の関係（同一性と差異性））。

→　意味は総体的である、意味の地平＝意味世界

文化は意味世界として分析できる。

・意味根拠（意味世界の正当性）＝意味内実

根底かつ深淵

（２）前期ティリッヒの科学論

芦名定道「現代キリスト教思想における自然神学の意義」（『哲学研究』第 596 号、2013 年 10 月、pp.1-23.）より。

「文化の神学」は、一九二〇年代のティリッヒを特徴付ける思想構想であって、近代プロテスタンティズムが直面した宗教と文化の分裂状況（他律と自律の対立）を克服するために、宗教と文化を新たな仕方で総合することを目指している。つまり、その意図は、近代の自律的理性に合致した真理とキリスト教的伝統の信仰的真理という二重真理状態を克服することなのである。

この二重性はどんなことがあっても廃棄されねばならない。それは、意識にのぼるやいなや耐え難いものとなる。なぜなら、それは意識を破壊するからである。（Tillich, 1919, S.74）

この「文化の神学」構想には、宗教研究という観点から、次の三つの課題が課せられる。１．文化の一般的な宗教的分析、２．文化の宗教的類型論と歴史哲学、３．文化の具体的で宗教的な体系化の三つである（ibid., S.76）。

しかし同時に、神学には、神律的という精神的態度が結びつけられている。神律（Theonomie）を論じるには、意味概念の分析が必要となるが、[(8)] ティリッヒの意味論の要点は次のようにまとめられる。意味は意味連関という形式を有している。たとえば、語の意味はその語が属する言語体系（連関）内の諸語との関係性（差異と類似）という形式において規定できる。この点で意味とは意味連関にほかならない。しかし、意味連関全体の

意味はこの意味連関内部の関係性という形式によっては規定できない。言語体系の全体は、言語共同体の基本的な実在理解に依存し、歴史性を帯びているからである。ティリッヒは、これを意味の内実（Gehalt）と呼び、「形式―内実」（Form-Gehalt）という対概念にもとづく意味論によって、諸学の体系の構造を論じている。諸学の体系も、諸学相互の形式（これが先に見た科学性に対応する）だけでなく、体系の内実という点からも理解されねばならない。ティリッヒは体系の内実について次のように説明している。

> 現実の体系が構築されるところにおいては、形式の内に、単なる形式以上のものが顕わになる。この体系の生きた力が体系の内実であり、体系の創造的な立場、根源的直観なのである。あらゆる体系は、それを根拠づけ構築する原理によって活力が与えられている。しかし、すべての究極原理は究極的な現実直観、根源的な生の態度の表現である。内実が、諸学の形式的体系を通して、あらゆる瞬間に現れ出る。それは形而上学的であり、すなわち個々の形式や諸形式全体を超えている。……形而上学的ものは体系の生きた力、意味、血液なのである。（ibid., S.118）

（３）意味世界の転換における近代の成立

芦名定道・小原克博『キリスト教と近代――終末思想の歴史的展開』（世界思想社、2001年）。

前節では意味根拠を意味世界の正当化という点から説明してきたが、ここでは、この意味世界を根拠づけるという機能をより精密に捉えることが必要になる。なぜなら、根拠付けや正当化とは、コンテキストによって、いわゆる正当化としても、あるいは転換としても機能できるからである。そこで、意味世界Ａ（たとえば、江戸時代の封建的社会システム）から意味世界Ｂ（たとえば、明治時代の天皇中心的社会システム）への歴史的転換期において、意味根拠がどのように機能するかを考えてみよう。以下、意味世界Ａを正当化する意味根拠をａ、意味世界Ｂの意味根拠をｂとする。

まず、注目いただきたい点は、意味世界ＡからＢへの転換期においては、意味世界ＡとＢが競合しており、いずれが勝利を収めるかは、まだ決定されていないという点である。それをどの程度と考えるにせよ、最終決着以前の段階においては、江戸幕府が薩長に勝利して、幕藩体制が存続するという可能性も、存在していたのである。この状況において、意味世界（とくに、政治社会システム）をめぐる争いは、意味根拠の争いにならざるを得ない。日常性の中で意味世界の自明性が確保されているときには、意味根拠はことさら問われることもない。しかし、いったん或る意味世界がその正当性をめぐる争いに巻き込まれるとき、それは意味根拠間の、したがって、宗教的な争いに至らなければ、決着が付かないことになる。江戸時代から明治時代にかけて、平田神道による古事記解釈が及ぼした作用や、廃仏毀釈運動は、この意味根拠をめぐる争いの一コマだったのである。

こうして、意味根拠は競合する諸意味世界に対して、正当化と転換（批判）という二重の機能を果たすことになる。意味世界ＡとＢの競合の中で、意味根拠ｂは、意味世界Ｂを正当化しつつ、意味世界Ａを転換するよう作用するのである。以下、意味根拠の正当化機能をイデオロギー、それに対して、転換（批判）機能をユートピアと呼ぶことにしたい。というのも、意味根拠は、それ自身に相関する意味世界については、基本的に正当化を行い、いわゆるイデオロギーとして機能するからであり、またそれ自身と相関しない対抗関係にある意味世界に対しては、転換機能を発揮するからである。ユートピアとは、未だ現実化していない意味世界の正当化のために、転換機能が既存の意味世界（既存の社会システム）に対して、向けられるという事態に他ならない。意味根拠としての宗教は、本来イデオロギーとユートピアの二重性において機能しているのである。たとえば、キリスト教

は、ローマ帝国の国教となることによって、ローマ帝国のシステムを正当化するイデオロギーとして機能すると同時に、「神の国」の理念からローマの平和を相対化し、批判することもできたのである。宗教は、イデオロギーかユートピアかの一面化に陥るとき、その本来の生命力に関して危機を迎えていると言わざるを得ないであろう。

２：聖書翻訳の意義

（1）聖書翻訳とキリスト教

１.「宗教（キリスト教）と文化」の関係の焦点としての聖書翻訳
　　キリスト教―翻訳聖書―文化
２．聖書翻訳とキリスト教、翻訳聖書はキリスト教の構成要素である
・７０人訳聖書（ＬＸＸ）の場合。
秦剛平『乗っ取られた聖書』京都大学学術出版会、2006 年。
「アレクサンドリアにおけるモーセ五書のギリシア語への翻訳の問題」
「一世紀の後半からはじめて二世紀の終わりまで登場した、エウセビオスの『教会史』の中であげられている教会の物書きたち」「彼ら教会の物書きたちがヘブル語聖書ではなく、ギリシア語訳の聖書を使用したことです。」「ギリシア語訳が彼らにとってもはや「翻訳聖書」ではなく、それこそが「聖書」となっていたことなのです。その聖書は彼らによって「神の息吹を与えられた聖なる書」と見なされていたのです。」「正統派の教会によって異端のレッテルをポーンと貼られ、教会の交わりの外に置かれた一派の者たちでさえ、ギリシア語訳を自分たちの聖書として読んでいたことです。」（167-168）
・Many modern Christians are fixed with the search for an “original text,” but from the begininng it was not so. Early Christians were able to appreciate the diversity of divine communication, and even when some began to recognize the diversgences between the Bible of the Jews and the Greek Christian Bible most welcomed the opportunity to learn more showing no anxiety at the thought of not having the “original.” This is distinctively modern theological anxiety.（Timothy Michael Law, *When God Spoke Greek. The Septuagint and the Making of the Christian Bible*, Oxford University Press, 2013, p.168）
・ウルガタ・ラテン語聖書の場合。
加藤哲平『ヒエロニュムスの聖書翻訳』教文館、2018年。
　序章　「ヘブライ的真理」とは何か
　第Ⅰ部　ヒエロニュムスの世界
　第Ⅱ部　ヒエロニュムスの思想
　　第１章　ギリシア語かヘブライ語か――ヒエロニムスの翻訳論
　　第２章　新約聖書における旧約引用
　　第３章　ヘブライ人、使徒、キリスト
　　終章
　第Ⅲ部　ヒエロニュムスの言葉

（2）近代・翻訳文化とキリスト教

３．原典・原語主義：近代の人文学は、原典主義を基本にする。これは、「知の歴史性」を自覚した歴史主義を基盤にしている。
　↓
　聖書研究は、ヘブライ語とギリシャ語の原典でなされる。
４．近代人文主義１：ウルガタ（ラテン語聖書）から、原典に帰れ。

５．近代人文主義２：聖書の近代語訳（英語、ドイツ語、フランス語など）の推進。
cf. ヒューマニズムの多義性
６．宗教改革・聖書主義のもたらしたもの：「聖書のみ」のスローガンの実現過程＝近代国民文化形成過程（翻訳・近代語・印刷出版・教育）
ルター訳聖書、欽定訳聖書：近代語、国民文学の形成へのインパクト
↓
ヨーロッパ文化理解の鍵としての近代語訳聖書
７．The two greatest influences on the shaping of the English language are the works of William Shakespeare and the English translation of the Bible that appeared in 1611. The King James Bible ---named for the British king who ordered the production of a fresh translation in 1604 --- is both a religious and literary classic.（McGrath,1）
「英語文化の形成に大きな影響を与えてきた聖書の名句」（寺澤、i）
８．創造活動としての翻訳。翻訳は、それ自体が新しい創造活動である。

（３）宗教と翻訳
９．翻訳なしに宗教は可能か。生きた宗教は土着化（文化に受容されそこに根ざすこと）しなければならない。→外来宗教の土着化は、「翻訳」を不可欠の構成要素とする。
10．翻訳された聖典は、その宗教の新しい創造的な形態となる。仏典の漢訳。
11．「Theos」の訳：deus、God、デウス、神→既存の用語と新しい造語、あるいは音訳。
12．「宣教師が試みた翻訳のなかで問題になったのは、キリスト教独自の概念をどのような日本語であらわすか、という点であった。ザビエルたちは、はじめ根本仏「大日如来」とキリスト教の神との超越性という類似点に着目して、唯一絶対神を「大日」と呼んでいたのだが、仏僧との議論の過程でキリスト教の教義のうえで見過ごすことのできない相違点、すなわち大日如来は万物の創造主ではないということ、仏教の世界にはイエス・キリストの受難が欠落していることに気づき、「大日」の使用を禁止する。代わりに選ばれたのは「デウス」というラテン語からの音訳語であった。」（米井、20）
愛：御大切
「キリシタンの日本語研究と翻訳の試みが刻印されたキリシタン文献は、日本語史の研究のうえで大きな可能性をもっているといえるだろう。」（25）
13．日本語の「神」は、God の翻訳語として定着する過程で、日本語の「神」の意味内容を変容させた。
14．翻訳理論、直訳や意訳か？
厳密さと理解しやすさ（文脈における意味の再現）という二つの翻訳の基準。
↓
・翻訳とその反復の必要性。
翻訳は完全ではなく、限界内の作業。受け手の変化は新しい翻訳を要求し、新しい翻訳は受け手の文化に影響する。
・翻訳の歴史は、宗教の歴史の構成要素である。
15．ルター訳聖書の場合。
アントワーヌ・ベルマン『他者という試練――ロマン主義ドイツの文化と翻訳』みすず書房、2008年。
「ルターの翻訳の歴史的意義」「「原典の特徴」にこだわる「批評的翻訳」を断念することでルターは、一般のドイツ人にも読むことができ、新しい宗教意識、つまり宗教改革によりもたらされた意識に対して揺るぎない基盤を提供しうる翻訳を作り出すことができた。」（52）

「ルターは最初から聖なるテクスト(Heilige Schrift)のドイツ化すなわち Verdeutschung を目指した。」「ルターの課題とは、良いドイツ語(gute Deutsch)で書かれたテクストを信者のコミュニティに供すことだった」(53)

「良いドイツ語とは民衆のドイツ語なのである。」「二重の企て」「先験的に方言でしかない自分自身のドイツ語、すなわち高地方言(Hochdeutsch)で訳すこと。だが同時に、まさにこの翻訳過程を通じて、一地域方言にすぎぬそのドイツ語を全国共通のドイツ語へと、一種の共通語へと高めること。」(54)

「一般化された民衆言葉」「高ドイツ語を、何世紀にもわたって通用するような書かれるドイツ語の媒体へと仕上げた」「偉大な「宗教改革者」であると同時にルターはそれ以降、作家、言語の創造者とも見なされるようになる。」(55)

「爾後ドイツは、宗教的・政治的というばかりか文学的にも、ルター以前とルター以後に分かれることとなる。」(57)

「聖書の言葉を信徒の共同体に開くことは」「同時に」「彼らに聖書固有の話し方を伝えることでもある点をルターは理解していた。」(63)

「ひとつの固有の国民文化の形成および発展は、異なるものとの徹底的かつ決然たる関係としての翻訳を媒体としうるし、またそうでなくてはならないことをもルターの聖書は示唆しているからだ。」(65)

＜参考文献＞

１．寺澤芳雄編著『名句で読む英語聖書――聖書と英語文化』研究社。
２．ピーター・ミルワード『英語の名句・名言 』講談社現代新書。
３．清水護『英訳聖書の語学・文学・文化研究』学術出版。
４．柳父章『「ゴット」は神か上帝か』岩波書店、『翻訳の思想』平凡社。
５．米井力也『キリシタンと翻訳――異文化接触の十字路』平凡社。
６．Alister McGrath, *In The Beginning, The Story of the King James Bible and How It Changed a Nation, a Language, and a Culture*, Anchor Books, 2001.
７．鈴木範久『聖書の日本語――翻訳の歴史』岩波書店。
８．上智大学キリスト教文化研究所編『日本における聖書翻訳の歩み』Lithon。
９．安西徹雄／井上健／小林章夫編『翻訳を学ぶ人のために』世界思想社。
10．徳善義和『マルティン・ルター――ことばに生きた改革者』岩波新書。
11．David Crystal, *Begat. The King James Bible & the Eiglish Language*, Oxford University Press, 2010.
12．Hannibal Hamlin and Norman W. Jones（eds.）, *The King Lames Bible after 400 Years. Literary, Linguistic, and Cultural Influences*, Cambridge University Press, 2020.